

3. (ア) ~ (エ) のコードに対する適切なアベイラブル・ノート・スケール名を書きなさい (開始音名も記入すること)。

(ア) _____ (イ) _____
 (ウ) _____ (エ) _____

●コード判別、コードの度数と機能、アベイラブル・ノート・スケールに関する問題です。Advanced II では、ノン・ダイアトニック・コード (代理コードやセカンダリー・ドミナント) を含めた各種のコードの判別と、コードに含まれるテンションの度数を答える必要があります。テンションの度数はコードのルートを基準に割り出すことができますが、それだけではなく、「そのコードに使用可能なテンション」であるかどうかを含めた、総合的な理解が望ましいところです。

さらに、それらノン・ダイアトニック・コードの機能、コードの種別に対応したアベイラブル・ノート・スケール (ドミナント7thコードにおける複数のスケールを含む) についても把握しておきましょう。なお、問題 (ア) のように複数のスケールが考えられる場合、いずれも正解となります。

(正解) 1. ① C7(^b13) ② Gm7(⁹) ③ Fmaj7(⁹) ④ F7(^b9, ^b13) ⑤ B^b maj7(⁹) ⑥ Am7(¹¹)
 ⑦ A^b7(¹³) ⑧ C7(^b9, ¹³)

2.

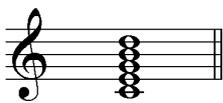
	度数	機能
A	II m7	S
B	VI m7	T
C	V 7	D
D	V 7/IV	Sec.D
E	^b VII 7	Sm

3. (ア)C ハーモニック・マイナーP5 ↓スケール (またはC オルタード・スケール)

(イ)E^b リディアン・ドミナント・スケール (ウ)A フリジアン・スケール (エ)G ドリアン・スケール

II. 例にならって、次のコード・ネームの和音の基本形を書きなさい。

(例) Cmaj7(⁹)



A^bmaj7([#]9, [#]11)

Faug7(⁹)

C[#]m7(^b5, ^b13)

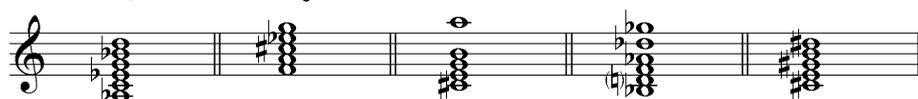
B^b7(^b9, ^b13)

C[#]m7(⁹)



●Advanced II では、テンションも含めたコードの構成音を問われます。ここでも、コードとテンション・ノートの関係についての理解が必要になります。

(正解) A^bmaj7([#]9, [#]11) Faug7(⁹) C[#]m7(^b5, ^b13) B^b7(^b9, ^b13) C[#]m7(⁹)



Ⅲ. 次の曲を、1～2小節の例に続けて、3小節目以降をリハーモナイズしなさい。コードの数は必要に応じて増やしてもかまいません。

〈オリジナル〉

〈リハーモナイズ〉

- 原曲のコードをリハーモナイズする問題では、メロディーに合い、曲の流れとしても自然なコード付けをすることが求められます。リハーモナイズは、元のコードの代理コードの使用、ドミナント・コードのトゥー・ファイブ等への分割、さらにセカンダリー・ドミナントの付加といった方法を使うのが一般的です。（これらについては、『ピアノ・パフォーマンス 4<改訂版>』4章（61ページ～）で詳しく解説されています。）
正解は一つではありませんので、いろいろな可能性を試みながら、メロディーとの相性に注意してまとめていきましょう。

(解答例) 〈リハーモナイズ〉

IV. 下の表は、ノン・ダイアトニック・コードの度数と機能について書かれたものです。例にならって表の空欄をうめなさい。

(注)機能の表示は以下の略号で答えなさい。

Tonic→T Dominant→D Subdominant→S
 Subdominant Minor→Sm Secondary Dominant→Sec.D

Key	度数	コード・ネーム	機能
例 C	^b II maj7	D ^b maj7	Sm
E ^b	^b VII maj7		
	V 7/V	C#7	
D	^b II 7		
A	^b VI maj7		
F		B ^b 7	
	V 7/VI	B7	
A ^b		A maj7	
C		A7	
E	#IV m7(^b 5)		
B ^b		A ^b 7	

●ノン・ダイアトニック・コードの機能についてのまとめです。各種の代理コードやセカンダリー・ドミナントについて、キーと度数の関係、およびその機能を網羅的に把握しておくことが必要です。これらに関しては『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 2』第5章、特に代理コードの機能については30ページの表をしっかりと頭に入れておくと良いでしょう。

(正解)

Key	度数	コード・ネーム	機能
E ^b	^b VII maj7	D ^b maj7	S
B	V 7/V	C#7	Sec.D
D	^b II 7	E ^b 7	D
A	^b VI maj7	F maj7	Sm
F	IV 7	B ^b 7	S
G	V 7/VI	B7	Sec.D
A ^b	^b II maj7	A maj7	Sm
C	V 7/II	A7	Sec.D
E	#IV m7(^b 5)	A# m7(^b 5)	T (S)
B ^b	^b VII 7	A ^b 7	Sm

V. 例にならって、①～⑦のコードとメロディーに対応した、適切なアベイラブル・ノート・スケールとテンション・ノートの音名と度数を書きなさい。また、アボイド・ノートがある場合はアボイド・ノートの音名と度数も書きなさい。

(アボイド・ノートがない場合はNo Avoidと書きなさい。)

(例)

Gmaj7 Em7 Am7 ① ② Gmaj7

Cmaj7 D7

③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

Dm7 G7 Cmaj7 F7 Bm7 E7 Am7 D7 Gmaj7

●楽譜からアベイラブル・ノート・スケールを導き出し、五線にスケールを、またテンションとアボイドを音名と度数で書き出す問題です。Advanced II では、ノン・ダイアトニック・コードについても問われます。『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 3』第10章 (35～66ページ) の内容をよく整理して覚えておくことが大切です。

問題ではこれに基づいて、曲のキーに対する度数、さらにメロディーに含まれる音 (テンション・ノートとなり得る音) から、適切なアベイラブル・ノート・スケールおよびテンション、アボイドを判断します。特にドミナント7thコードの場合はメロディーをよく考慮して、最適なものを選択しましょう。

(なお、⑥、⑦のようにメロディーから複数のスケールが可能な場合は、どちらを選んでも正解です。)

(正解)

(例) スケール：G イオニアン・スケール

Tension = A (9th)

Avoid = C (4th)

① スケール：C リディアン・スケール

Tension = D (9th) F#(#11th)

Avoid = No Avoid

② スケール：D ミクソリディアン・スケール

Tension = E (9th) B (13th)

Avoid = G (4th)

③ スケール：D ドリアン・スケール

Tension = E (9th) G (11th)

Avoid = B (6th)

④ スケール：F リディアン・ドミナント・スケール

Tension = G (9th) B (#11th) D (13th)

Avoid = No Avoid

⑤ スケール: B フリジアン・スケール



Tension = E (11th)
Avoid = C (\flat 2nd) G (\flat 6th)

⑥ スケール: E ハーモニックマイナーP5↓スケール (※またはE オルタード・スケール)



Tension = F (\flat 9th) C (\flat 13th)
(※G (#9th) A#(#11th))
Avoid = A(4th) (※No Avoid)

⑦ スケール: D ハーモニックマイナーP5↓スケール (※またはD オルタード・スケール)



Tension = E \flat (\flat 9th) B \flat (\flat 13th)
(※F (#9th) G#(#11th))
Avoid = G (4th) (※No Avoid)

VI. 次の曲に対し4 Way closeでVoicingを行ないなさい。*印の箇所にはトップ・ノート以外にもテンションを使用しなさい。また、ベース音も書きなさい。

●メロディーに対するクローズ・ボイシングです。クローズ・ボイシングは、まずメロディーの音をトップとして、その下にコード・トーンを順に配置します。テンションを使用するには、各コードのAVAILABLE・ノート・スケールを考慮して付加可能なテンション・ノートを見つけます。テンションを付加した場合はその直下のコード・トーンを省略します。（主として、ルートの代わりに9thを使用する場合があります。なお、*印以外の箇所でもテンションを付加するかどうかは任意です。）

ドミナント7thコードのテンションは、メロディーによっては9th、 \flat 9th、13th、 \flat 13th等複数の候補が使用可能ですが、メロディーがナチュラル系（9th、13th）ならナチュラル系テンション、メロディーがオルタード系（ \flat 9th、 \sharp 9th、 \flat 13th）ならオルタード系テンションを使うのが自然です。その他、この解答例通りに限らず、ラスト・サウンド・アタックやアプローチ・ノートのボイシングも場合に応じて使用してもよいでしょう。

以上のクローズ・ボイシングの手法については『ピアノ・パフォーマンス 4<改訂版>』第1章（6～31ページ）および『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 4』第12章I～IV（8～25ページ）に整理されています。

(解答例)

VII. 次の曲に対し、4声～5声でOpen Voicingを行ないなさい。*印の箇所にはトップ・ノート以外にもテンションを使用しなさい。

●メロディーに対するオープン・ボイスイングです。Advanced Iと同様、シンプル・オープン・ハーモニー、Drop2、Drop3、Drop2&4あるいはスプレッド・ボイスイング等の方法を適宜組み合わせてボイスイングします。Drop2やDrop3でできた新たな2nd、3rdボイスがテンションに変更可能であれば、テンションを使用することができます。ドミナント7thコードでのテンションの使い方はクローズ・ボイスイングと同様ですが、ラインの流れによってはこの例（1小節目）のように9th+^b13thのような組み合わせを選択することも可能です。また、最後のB^bは本来はトライアドですが、ここでは6thをテンションとして使用しています。以上、オープン・ボイスイングのさまざまな方法や注意点については、『ピアノ・パフォーマンス 4<改訂版>』第2章（32～48ページ）および『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 4』第12章V（26～32ページ）に整理されているので、譜面上でイメージできるように練習しておくといいでしょう。

(解答例)